

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16853

研究課題名(和文) 宋・元・明時代における江南中国の支配と変容

研究課題名(英文) Domination and transformation in south of the Yangtze River, China from Song period to Ming period

研究代表者

小林 晃 (KOBAYASHI, Akira)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授

研究者番号：80609727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国王朝による江南支配のあり方が、南宋から明代にかけてどう変容したのかを追究した。南宋時代については、南宋後期の史彌遠政権から賈似道政権にかけての強権政治が、モンゴルの脅威に対抗するための戦時体制として形成されていったことを明らかにした。また元朝は帝国全体の一体的な支配を維持するために、南宋の戦時体制によって生み出された公田からの税糧を重視したが、当時の江南は水害が多発する状況にあった。元朝は江南の富裕層と対立しつつ水利政策を推進したが、抜本的に解決することはできず、その解決は明朝にまで持ち越されることになったのである。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined how the Chinese dynasty rule of Jiangnan(江南) China rule changed from Southern Song(南宋) period to Ming(明) period. As for the Southern Song period, I studied the powerful politics from the Shi miyuan(史彌遠) regime to the Jia sidao(賈似道) regime in the late Southern Song period. Their powerful politics was formed as a wartime system to combat the threat of Mongol empire. In addition, the Yuan dynasty(元朝) utilized the fruit of the wartime system of the late Southern Song period for the unified rule of the whole Empire. In other words, it is a huge harvest from the government-owned farmland(官田). However, flood damage occurred frequently in Jiangnan(江南) China at the time. The Yuan dynasty(元朝) promoted the water management policy while conflicting with the wealthy people of Jiangnan(江南) China, but it did not reach a drastic solution. That solution was to be carried over to Ming dynasty(明朝).

研究分野：中国史

キーワード：江南 南宋 元 官田 公田 水利 四明史氏

1. 研究開始当初の背景

本研究開始時において問題となったのは、近世中国の歴史を再構成するうえで、南宋元明と続く、歴代王朝の江南支配のあり方を通時代的に解明した成果の欠如であった。かつての宋代史研究や明末清初研究においては、当該期の中国江南で社会・経済両面で大きな発展があったとの見通しのもと、多くの研究が蓄積されてきた。明末清初の江南では大土地所有とともに商品経済が発達していたため、その先進性を宋代にまで遡及させようとした理解であったといえる。これによって元代・明初の江南は戦乱によって荒廃した時期と見なされ、あまり重視されてこなかったのである。

ところが1979年の江南デルタシンポジウムにおいて、こうした理解は否定されることになった。宋代の江南はいまだ開拓途上であり、集約的な農業が営まれる状況にはなかったことが明らかになったのである。これ以降、かつての宋代史研究によって生み出された多くの成果を、新たに判明した江南デルタの後進性を踏まえつつ、いかに整合的に継承していくかが問われることになった。それまで軽視されていた元代・明初を含めて、南宋以降の江南デルタの発展史を、通時代的に明らかにする必要性が生じたのである。しかしながらその後の研究が断代史的な研究に安住するようになり、そうした視点の必要性は閉却されることになったのであった。

2. 研究の目的

上記の問題点のもと、本研究では南宋から明初に至る中国江南の政治・社会のあり方の変化を、通時代的に跡づけることを研究目的として設定した。とりわけ本研究で重視したのが、南宋末期に賈似道によって設置された、江南デルタにおける広大な公田である。賈似道は南宋末期に16年にもわたって中央政治を壟断した人物であった。そして賈似道が領導していた当時の南宋政権にとって、モンゴル高原と北中国を領有して中華王朝として脱皮を遂げつつあった元朝といかに対峙するかが喫緊の課題となっていた。こうしたなか、王朝国家の直轄田土として設けられたのが公田であり、そこには民間の私有田地よりも高額な税糧が賦課されたのであった。報告者の理解では、この公田は前線でモンゴルと対峙する膨大な南宋軍の食料を確保し、さらにその軍隊を王朝権力のもとに統御するための原資として設けられたものであった。

南宋末に設けられた公田は、その後、元朝・明朝には官田として継承され、その面積をさらに拡大しつつそれぞれの王朝にとっての重要な財政基盤となっていく。本研究では、いわば戦時体制の産物である公田が、次代の王朝によっていかに発展的に継承されたのかを理解することにより、中国江南の政治・社会の変容過程を跡づけようと考えたのである。

3. 研究の方法

本研究においては、計画当初は元代・明初を主な対象として研究を進めようと考えていた。そのため、元代の任仁発が編纂した『水利集』と、明朝の太祖による『御製太誥』とを主要な検討史料として想定していた。いずれも江南デルタの田土について重要な史料が含まれると考えられたからである。しかしその後の研究の展開によって、公田法を生み出した南宋後期の戦時体制がどのように形成されたのかという点から説き起こし、その公田が元朝にどう発展的に継承されたのかを明らかにしたほうが議論の展開としてはより適当であることに気づき、『御製太誥』を検討史料から外して南宋時代の検討にも力を割くように方針を転換することにした。

以上の結果、研究方法としては、第一に北方勢力と南宋との緊張関係が高まった13世紀初頭の政治史について、当時の官僚の書簡を集中的に分析した。さらに第二として、宋代以降の江南デルタにおける水文の変容過程を踏まえるとともに、『水利集』に収録されている元代の水利政策に関する全史料を解読することに注力した。『水利集』に関しては、抄本であるため影印本では字句が潰れてしまっていて読解しづらい部分もあったため、長時間を費やして元代に関する全文書を電子データ化したことも特筆しておきたい。

4. 研究成果

(1) 南宋後期における戦時体制の形成

従来の研究では、南宋時代は独裁的な宰相が連続して登場した時代であると漠然と見なされてきた。しかし実際には、南宋時代の独裁的な宰相の登場の背景には、北方に強大な軍事力を有する勢力が台頭していたことが重要な要因として作用していた。とくに南宋後期の独裁的な宰相については、モンゴル帝国の興隆という世界史的な事件と不即不離に理解される必要があるのである。

このような観点から南宋後期の戦時体制が形成された時期がいつなのかを検討したところ、1217年の宋金戦争にまでさかのぼりうることが判明した。このとき金国は北方のモンゴルに圧迫されたため、南中国に版図を広げるべく南宋領に侵攻することになった。このとき南宋国内では対金強硬論を唱える朱子学者が強い発言力を有していたが、彼らが主導権を握った戦いにおいて、南宋軍は大敗北を喫した。この事件を境にして、宰相の史彌遠は国内の対金強硬論者を冷遇し、指揮系統を宰相のもとに一元的に集中する方策をとることになった。これが南宋後期における戦時体制の祖型になったと思われる。この成果は右の5. 主な発表論文等〔雑誌論文〕の論文で公表される予定である。

(2) 南宋後期における戦時体制の継承

史彌遠が死去したあとの南宋政治においては、その甥の史嵩之や子の史宅之が数年に

わたって大きな影響力を持つことになったが、彼らが失脚もしくは死去したあとは史氏一族が中央で主導的な立場につくことはなくなった。その後を受けて台頭したのが賈似道であった。先行研究においては、南宋後期の史彌遠政権と末期の賈似道政権の間には連続性は見いだされてこなかった。ところが本研究によって、賈似道の異母姉の母が史氏の女子であったこと、賈似道が史彌遠の人脈を濃厚に継承していた事実が明らかになった。これによって賈似道によって創始された公田法が、史彌遠政権のもとで形成された戦時体制の延長線上に生起していたことが跡づけられたのである。この成果は右の5. 主な発表論文等〔雑誌論文〕の論文で好評された。

(3) 元代の江南支配と水利政策

南宋の公田は元朝に官田として継承された。現存する地方志からは、常州・嘉興・松江の三路府だけで、官田税糧は60万石以上に達する。江南デルタ全体の地方官府管轄の税糧は250万石前後であったと推測されるから、江南デルタの官田税糧は全体でその半数ほどに達した可能性もある。そして官田税糧は優先的に元朝の首都大都(現在の北京市)に海運によって送られたが、その海運糧は最盛期には300万石以上にも達した。さらに元朝は、公田から継承した官田以外にも、旧南宋の皇族や、元朝江南の富裕層から新たに没収した田土から新たな官田を創出した。仁宗朝ではこの新官田の税糧124万石を海運糧に充てることが定められた。元朝は海運糧をモンゴル高原へと輸送し、モンゴル高原と中国本土とを一体的に統治する体制を築いたとされる。南宋末の公田を基盤として形成された官田からの税糧が、元朝の中央財政にとって重要な財源となっていたことがうかがえるのである。

しかし元代の江南デルタでは、世祖朝末頃から数年ごとに大水害に見舞われる趨勢にあった。これは江南デルタで宋代以来続いていた呉淞江の淤塞が元代において臨界点に達し、排水不良の状態に陥ったことに起因する災害であった。元朝は江南デルタの官田税糧に強く依拠する体制にありながら、水害が多発していたがゆえに、財政に不安定性を内包せざるをえなかったのである。元朝中央はこうした状況に対応するため、江南デルタで大規模な水利工事を行ったり、恒常的に水利施設の手当をする特設官庁を設けたりするなどの対策を施したが、中央政府の強い姿勢にもかかわらず、これらの政策は必ずしも順調には進められなかった。江南デルタの富裕層は、元朝の中央・地方の大官と結びつき、そうした元朝の水利政策を様々に妨害したからである。江南デルタにおける元朝の水利政策は不徹底に終わり、その全面的な改善は次の明朝太祖朝における江南富裕層の大弾圧と、太宗朝における黄浦江の形成にまで持

ち越されることになったのである。なおこの研究成果は、2019年度に刊行予定の『宋代史研究会研究報告集』第11集への寄稿論文で公表する予定となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

小林 晃「南宋四明史氏の斜陽 南宋後期政治史の一断面」(三木聰編『宋-清代の政治と社会』汲古書院、pp.71-101、2017年)

小林 晃「南宋晩期対兩淮防衛軍的駕御体制 從浙西兩淮發運司到公田法」(鄧小南主編・平田茂樹副主編『過程・空間 宋代政治史再探研』北京大学出版社、pp.272-291、2017年)

小林 晃「新刊紹介『宋代史から考える』編集委員会編『宋代史から考える』(『史滴』39、pp.88-91、2017年)

小林 晃「南宋寧宗朝後期における史彌遠政権の変質過程 對外危機下の強権政治」(『史朋』50、2018年刊行予定)

〔学会発表〕(計8件)

小林 晃「南宋中期における史彌遠政権の変質過程」(第64回東北中国学会、2015年5月31日、東北大学主催)

小林 晃「南宋寧宗朝における史彌遠政権の変質過程」(第41回宋代史研究会夏合宿、2015年8月29日、福岡大学主催)

小林 晃「南宋寧宗朝後期における史彌遠政権の変質過程 對外危機下の強権政治」(共同シンポジウム「分裂する中国 二つの南北朝」、2015年11月28日、富山大学主催)

小林 晃「南宋四明史氏の斜陽 南宋後期政治史の一側面」(東洋文庫談話会、2016年3月23日、公益財団法人東洋文庫開催)

小林 晃「南宋四明史氏の没落 南宋後期政治史の一個側面」(十至十三世紀東亞史的新可能性：首届中日青年学者宋遼西夏金元史研討会(国際学会)、2016年9月24日、(中国)復旦大学開催)

小林 晃「南宋四明史氏の斜陽 南宋後期政治史の一側面」(第192回宋代史談話会、2016年12月3日、大阪市立大学開催)

小林 晃「南宋寧宗朝後期史彌遠政権の変貌過程 對外危機下の強権政治」(史料的新可能性：第二屆宋遼西夏金元史の日中青年学者的交流会(国際学会)、2017年9月3日、大阪市立大学開催)

小林 晃「南宋四明史氏の斜陽 南宋後期政治史の側面」(七隈史学会第19回大会、2017年10月1日、福岡大学開催)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

なし

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 晃 (KOBAYASHI, Akira)

熊本大学大学院 人文社会科学研究部 (文学系)・准教授

研究者番号：80609727

本研究は研究代表者のみで行ったものである。